

## “だめな親”をつくった二つの原因

富士の登山には、いろいろな登山口があるように、子供の教育法にも当然いろいろな方法があります。そのどれが良いのかは、一概には言えないものがあります。しかし、自分はこうと決めたら、とことんそれで押し通すことが大切です。

あれこれと迷うのは、御殿場口から登りかけて、吉田口に変えるようなもので、教育の場合はもっとはなはだしい弊害があります。この「あれこれと迷う」自信のないだめな親は、敗戦後に特にひどく見られるようになった現象ではありますが、その遠いきざしは「明治時代の義務教育」の施行にある、と私は見えています。

すでに述べましたように、教育は、親のわが子に対する本能的・必然的な行為ですから、法律的な権利義務というもので拘束すべき性質のものではありません。そういう道徳以前のものである教育を、道徳以下のものである法律によって拘束することにした「義務教育」は、明らかに教育の墮落と言わざるを得ません。

事実、義務教育が施行されるようになってからの親は、教育のすべてを学校に一任し、教師の蔭に退いてしまいました。ただ、家風を重んずるといふ伝統が残っていた戦前は、代々受け継いで来た家庭教育を捨て切ってはしませんでした。

このように、“だめな親”の原因は、明治の義務教育という考え方に由来する、と私は考えています。ただ、有史以来、瑞穂の国の名の通り、安定した食生活のお蔭で成立した世襲制により、家族制度が発達していたので、親の強い教権が伝統として残っていました。それが、だめな父親になりかかっていた父親を辛うじて支えていたのだと思います。

ところが、敗戦を機に、家族制度が破壊され、古いものがすべて価値を失ってしまった時、親は全く“だめな親”になるよりほかはなかったのです。

明治時代に由来するもので、義務教育と共に親をだめにする原因となったものがもう一つあった、と私は考えています。それは、「職業世襲制の廃止」です。

子どもの個性や能力を全く無視して、親の職業を無理矢理に継がせるということは、確かに良くないことです。しかし、それは、子が親の職業を継がない方が良く、ということではないのです。

ところが、「職業世襲の廃止」は、親の職を継がなくても良い、ということから、継がない方が良く、という考えに一変してしまいました。隣の芝生は美しく見えるように、他人の職業は、人にわからぬ苦勞があってもそれが見えないので、良いところばかりが見えがちです。しかし、世襲制のころは、他人の職業を羨むのは愚かなことと考えられて

いて、一般に自分の職業を誇りに思う、という気風がありました。

ところが親の職業を継がなくても良いということになりますと、親はわが子を少しでも楽で体裁の良い職業に就かせたいと考えるようになり、自分の職業を誇りに思うどころか、親は子に向かって、「こんな悪い職業は俺の代限りで結構。お前はもっと良い職業を選べ」と言うようにさえなっていました。

しかし、本来、子は親に似るものであり、子は親の性格も能力もそっくり受け継ぐものです。だから、子は親の職業を受け継いだ方が成功する確率が高いのです。

私には子が二人あります。長男は、宇宙ロケットの開発に従事しています。長男が大学に進む時、私は「自分の心からやりたいと思う道に進みなさい」と言って、子どもの選択に任せました。

しかし、長男にはなかなか職業の選択は困難だったのです。結局は、大学院で宇宙ロケットの研究をし、その結果その道に進んだのですが、それは本人の心からの希望ではなくて、指導教授の奨めによるものでした。

下の子は女ですが、私はこの子に対しても「自分の心からやりたいと思う道に進みなさい」と言っておりました。大学受験の時、学校の成績を調べてみますと、最も優れているのは国語科で、とりわけ漢文でした。

この時、私は初めて痛感しました。「蛙の子は蛙と言うが、親の得意なものは、自然と得意になるものだ。この得意な物を一層磨いて一層得意にすることを考えないということは何という愚かなことか」と。

娘に希望を尋ねてみますと、「医者になりたいので理科に進む」と言います。私は「お前の成績は、お父さんの専門とする漢文が最も優れている。この最も得意な学問を一生の仕事としてやっていくのが、最も良いのではないか」と忠告しました。

娘は、私の希望通り、大学で中国文学を専攻しました。娘は父親の知識を利用することが出来、父親の私も、娘と共通の話題が多く持て、娘が父親と同じ道を歩んでくれたことは、ほんとうに良いことだったと思っています。

それで、今ではこう思っています。「親の仕事を無理矢理に継がせるということには考慮が必要だが、子どもの自由に任せるとしても良くない。出来る限り、親は自分の仕事についてわが子に語ってやり、理解を深めさせ、自然と親の道を歩みたくたるように仕向けるべきである。人間一代の間に出来ることは高が知れている。代を重ねてこそ大を成すことが出来る」と。